



～視覚、そして足元の感覚を大事に活用して歩行する～

子どもは、幼いうちはよく転びます。ちょっとした段差に注意が向かなかったり、足を思った通りに動かせなかつたり、はたまた何かに気を取られたりして、つまずいては泣いてしまう経験は誰でもあることでしょう。

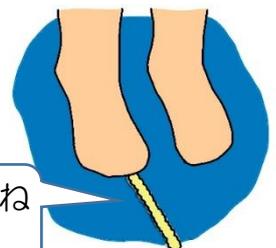
見えにくさのある子どもの場合、環境を把握しにくいことで歩いて移動することに消極的なことがあります。安心して移動するためには、点字ブロックのような目印が重要な役割を果たします。

今回ご紹介する遊びは、名付けて“実物あみだくじ”です。段ボール素材の厚めの白いロール紙を用いて、子どもの足の幅くらいに切って床に張り付けてあみだくじにしました。これは子どもの実態とねらいに合わせて素材を選んでいます。そして、ゴールには子どもが好きなものを置いてみました。



できるだけ目を上手に使うことをねらいとしたときは、大きさや床の色とのコントラストをつけて、足元を見やすくする工夫をする。

盲のお子さんのように足の感覚を頼りに歩行することをねらう場合は、凹凸がはっきりしたひもなどを使います。



🌈 “歩行に必要な力”を実物あみだくじにあてはめると

①知識

前後左右などの方向、自分の体の向き、何歩進むと曲がり角に当たるかなどが分かること。あみだくじの先のおもちゃに行くためのルート理解や記憶などです。

②感覚や知覚

足の裏の感覚でひもが交差しているところが分かることや、音の聞こえる方向を頼りに自分がどこを向いているか分かること、弱視のお子さんは視覚も合わせて使っていきます。

③姿勢や運動

自然な歩き方や姿勢で線やひもの上を上手に歩きます。平衡感覚や運動感覚を使って、まっすぐ歩くには集中力も必要です。

④社会性

外の道路を歩くときのマナーについて、飛び出さないことや手を上げて渡ることなどを少しずつ学んでいきます。安全に歩くためには、周りの人とのコミュニケーションも大事です。

⑤意欲関心

あみだくじのゴールには好きなものを置くと、そこに行ってみたいという意欲が増します。そして何より、楽しめるのが一番です。自分から積極的に関わる気持ちを育てることにつながります。

<参考文献>

澤田真弓・小林秀之編 「特別支援教育のエッセンス 視覚障害教育の基本と実践」 慶応義塾大学出版会